

## 『破戒』の読みについて

—「丑松」の「告白」—

—

島崎藤村の最初の長篇小説『破戒』の題名である「破戒」の意味が、主人公「丑松」の父の戒めを破ることにあったことは周知のことである。その父の「戒め」とはどのようなものであったかを藤村は第一章の三ではっきりと示している。「世に出て身を立てる穢多の子の秘訣—唯一つの希望、唯一つの手法、それは身の素性を隠すより外に無い、『たとへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅はうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたものと思へ。』斯う父は教へたのである。一生の秘訣とは斯の通り簡単なものであった。『隠せ。』—戒はこの一語で尽きた。」とある通りである。「丑松」の父は「烏帽子ヶ嶽の麓に隠れたが、功名を夢見る心は一生火のやうに燃えた人であった。」「自分が夢見ることは、何卒子孫に行はせたい。」「行け、戦へ、身を立てよ—父の精神はそこに在った。」(第七章、六)—そして「丑松」も又、父の言葉にこもる「希望と熱情」を否定しなかつたわけである。

しかし一方で「丑松」は、「猪子蓮太郎」という部落出の思想家に強く引かれていた。

橋 浦 史 一

蓮太郎は貧民、労働者、または新平民等の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてての迄は倦まず撻まず努めばかりでなく、また其を読者の前に突きつけて、右からも左からも説明して、呑み込まないと思ふことは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないといふ遣方であった。(第一章、四)

「丑松」の心は父の思念と以上のような「蓮太郎」の思想との間をゆれ動くことになる。部落民の「丑松」が「同じ人間であり乍ら自分等ばかり其様に軽蔑される道理が無い、といふ烈しい意気込を持つやうになつたのも」(第一章、四)「蓮太郎」の感化であった。しかし「丑松」は、「蓮太郎」が新しい著作『懺悔録』の中で書いたような事実、「我は穢多なり」という告白は父の戒めに従って口に出してはならないものであった。「丑松」は身分を隠して、佐々木雅彦氏が指摘するように明治の身分秩序の社会を立身を求めて登りつめようと思つていたわけである。

しかし「丑松」は、自分が部落民であることを隠していたために孤独であった。親友、「土屋銀之助」の「勝野文平」との対応に見られる「蓮太郎」評価の言葉、「新平民が美しい思想を持つとは思はれないぢやないか」(第三章、五)という言葉に対する「丑松」

の反応は次のように描かれている。

友達が帰つた後、丑松は心の激昂を制へきれないといふ風で、自分の部屋の内を歩いて見た。(中略) 賤民だから取るに足らん。斯ういふ無法な言草は、唯考へて見たばかりでも、腹立たしい。あゝ、種族の相違といふ屏擋の前には、いかなる熱い涙も、いかなる至情の言葉も、いかなる鉄槌のやうな猛烈な思想も、それを動かす力は無いのであらう。(第三章、六)

「丑松」と「銀之助」の友情が擬制の上に成りたっていることが明らかにされている。

同時に、農科大学の助手として旅立つことに決まった、「銀之助」の手紙を受けとった「丑松」の心持を藤村は、「功名を慕ふ情熱は、斯の友人の手紙を見ると同時に、烈しく丑松の心を刺激した。」(第十一章、三)と描いている。「丑松」が飯山の小学校の教師をしているのは、それが彼の人生の最終的な目的というわけではなかった。

一体、丑松が師範校へ入学したのは、多くの他の学友と同じやうに、衣食の途を得る為で—それは小学教師を志願するやうなもの、誰しも似た境遇に居るのであるから—といふもの、丑松も無論今の位置に満足しては居なかつた。(中略) 丑松に言はせると、たとへ高等師範を卒業して、中学か師範校かの教員に成つたとしたところで、もしも蓮太郎のやうな目に逢つたら奈何する。何処まで行つても安心が出来ない。それよりは飯山あたりの田舎に隠れて、じつと辛抱して、義務年限の終りを待たう。其間に勉強して他の方面へ出る下地を作らう。素性が素性なら、友達なんぞに置いて行かれる積りは毛頭無いのだ。斯う嘆息して、丑松は深く銀之助の身の上を羨んだ。(第十一章、三)

「蓮太郎」の悲劇を受けとめる丑松の思念は、立身を思う思いの中で否定的である。「丑松」は部落民をさげすむ「銀之助」の立身をうらやみ、それへの羨望の念をかくしていない。「丑松」は身分をかたく隠すことによつて立身を願う人生を歩むことを是としていたわけで、「蓮太郎」の生き方も、その思想も「丑松」の心の本音には届いていないことが明らかである。そうした「丑松」には、「子の胸に流れ伝はる親の其血潮」(第七章、六)が生き続けていたわけであつた。秘密を隠し続ける「丑松」の心は、この世の中でただ父とだけ結ばれていたのである。

しかし「丑松」の心は、一方で、「蓮太郎」に強く引かれていたことも事実であつた。

新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎といふ人物が穢多の中から産れたといふ事實は、丑松の心に深い感動を与へたので—まあ、丑松の積りでは、隠に先輩として慕つて居るのである。同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其様に軽蔑される道理が無い、といふ烈しい意気込を持つやうになつたのも、実はこの先輩の感化であつた。斯ういふ訳から、蓮太郎の著述といへば必ず買つて読む。(中略) 読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるやうな気がした。穢多としての悲しい自覚はいつの間にか其頭を擡げたのである。今度の新著述は、『我は穢多なり』といふ文句で始めてあつた。(中略) 『我は穢多なり』—あゝ、どんなに是一句が丑松の若い心を搔乱したらう。(第一章、四)

新しい思想家「蓮太郎」が「丑松」と同じ部落民であること、自分達が同じ人間でありながら軽蔑される道理がないということ、そうしたこと主張する「蓮太郎」に強く引かれると共に「穢多とし

ての悲しい自覚」が「丑松」自身に生れてきたことなどが記されている。「蓮太郎」は、「貧民、労働者、または新平民等の生活」に深い関心を持って、「社会の下層を流れる清水に掘りあてゐる迄は、倦まず撓まず努力める」思想家であつた。

「銀之助」は「丑松」の下宿をたずねて沈んでいる彼に次のように語りかける。

そりや好い感化なら可いけれども、悪い感化だから困る。見たまへ、君の性質が變つて来たのは、彼の先生のものを読み出したからだ。(第三章、五)

「では、貧民とか労働者とか言ふやうなものに同情を寄せるのは不可と言ふのかね。」と言うのが丑松の答であつた。「丑松」が没落士族である「風間敬之進」一家に深い同情を寄せるようになるのは、「敬之進」の家の家族構成や不幸な夫婦関係を理解することによつてであつた。

敬之進は酒怒の為に慄へて居た。素面で居る時は、からもう元氣の無い人で、言葉もすくなく、病人のやうに見える。(中略)

丑松は『藁によ』の蔭で見たり聞いたりした家族のことを思ひ浮べて、一層斯人に親しくなつたやうな心地がした。(第四章、四)

自ら士族の零落を語る「敬之進」の言葉に耳を傾ける「丑松」が、「蓮太郎」の著作や思想を思い浮べていたとは書かれていない。しかし「蓮太郎」の下層社会に向ける目は、「丑松」の没落士族、「敬之進」一家に向ける心情とまなざしに重なつてくるように思える。「丑松」は、自分の体験と自分の目を通して明治の世に零落を余儀無くされた不幸な家族を見守ることになつた。

又、これとは別に、政治家「高柳利三郎」の金銭目的のための部

落民の娘との結婚に関する「蓮太郎」の話が記される。

あるひは、彼男に言はせたら、六左衛門だつて立派な公民だ、其娘を貰ふのに何の不思議が有る、親子の間柄で選挙の時なぞに助けて貰ふのは至当ぢやないか—斯う言ふかも知れない。それならそれで可さ。階級を打破して迄も、氣に入つた女を貰ふ位の心意氣が有るなら、又面白い。何故そんなら、孤鼠々と祝言などを為るんだらう。(中略) まあ、君、僕等の側に立つて考へて見て呉れたまえ—是程新平民といふものを侮辱した話は無からう。(中略) 彼男も彼男なら、六左衛門も六左衛門だ。そんなところへ娘を呉れたところで何が面白からう。(中略) 虚栄心にも程が有るさ。ちつたあ娘のことも考へさうなものだがなあ。(第九章、三)

藤村は『破戒』の中で、社会の最下層の人々への目くばりを行うことをわすれなかつた。『破戒』の中にはしばしば「階級」という言葉が出て来る。藤村は『破戒』の中に明治の社会の身分秩序をながめる目を確かに導入していると言える。こうした明治の社会の中で犠牲をしいられる人々と対極の位置に、積極的に身分秩序の世界を受け入れて、そうした社会の中で権力をにぎつて行こうとする人々がいる。言うまでもなく、「予め金牌を胸に掛ける積りで、教育事業などに従事している」(第十八章、五) 校長や都視学や「文平」等である。こうした登場人物の対照は、主人公「丑松」を中心にして彼の身のまわりに一つの身分秩序の社会構造を創り上げていると言える。飯山は仏教の地である。「丑松」をとりまく飯山の人々の志保」の悲しみの原因である。「丑松」をとりまく飯山の人々のあり様は、山国の閉鎖的な社会の病いをあらわしながら「丑松」を包んでいるとも言える。「丑松」はそうした社会の中で自己の身分

を隠しながら立身の夢を持ち続けたのであった。

これから世に出て身を立てようとするものが、誰が好んで告白けるやうな真似を為よう。(中略)噫。いつまでも斯うして生きたい。と願へば願ふほど、余計に穢多としての切ない自覚が湧き上るのである。現世の歓楽は美しく丑松の眼に映じて来た。たとへ奈何なる場合があらうと、大切な戒ばかりは破るまいと考へた。(第三章、六)

「丑松」は「現世の歓楽」を肯定しながら「身を立てようとする」志をあつく保っていたわけである。

## 二

父の葬儀の帰途、「丑松」は吉田屋という宿に「蓮太郎」を訪ねる。「蓮太郎」から「高柳」の卑劣な結婚の話聞いて帰る道すがら、「丑松」はかねて「蓮太郎」にだけは自分の身分をうちあけて、先輩との心のきずなを真実のものとしていたいと考えていたことが実現できなかったことを嘆く。そうした時に、「第一、今の場合、自分は穢多であると考へたく無い、是迄も普通の人間で通つて来た、是から将来とても無論普通の人間で通りたい、それが至当な道理であるから」という思念が「丑松」の脳裏にのぼってくる。しかし「残念乍ら、丑松は自分で自分を欺いて居るやうに感じて来た。」(第九章、四)とすぐさま自らの思念を反省はするが、「丑松」が「同族」の人々、たとえば教え子の「仙太」などへのあつい同情を見せながらも、水本精一郎氏が指摘するように自分自身の身分の真実を、自己自身直視することから逃れようとする心情の傾向を持ち合わせていたことが示されている。「丑松」は、部落民が差別される身分秩序の社会の中で、自己の出自を否定、隠蔽しようとしなが

ら立身の道を歩もうとしていたのである。

「丑松」は、父を葬つて飯山に帰ってくるわけだが、その後、旅の途中で出会い、新しい妻を迎えた「高柳」の訪問を受ける。「如何せん、素養は無し、貴方等のやうに規則的な教育を享けたでは無し、それで此の生存競争の社会に立たうといふのですから、勢ひ常道を踏んでは居られなくなる。」(第十三章、四)と、「高柳」は自分の結婚の秘密をほめかしながら、妻が「丑松」の身分を知っていることをそれとなく暗示する。

こうして「丑松」の秘密は、やがて身辺の人々の口にはのぼるようになって行く。「文平」からの耳うちで、校長も「丑松」の秘密を知ることになった。その日、課業の明いた午後、「丑松」は、「銀之助」から教えられた「蓮太郎」のことが載っている新聞を人に知られないようにどこで読もうかと考える。「『いつそ二階の講堂へ行つて読め。』斯う考へて、丑松は二階へ通ふ階段を一階づゝ音のしないやうに上つた。そこは天長節の式場に用ひられた大広間で、「下手な教室の隅なぞよりは反つて安全な場処のやうに思はれた。」(第十四章、四)からである。「漠然とした恐怖の情は絶えず丑松の心を刺激して、先輩に就いての記事を読み乍らも、唯もう自分の一生のことばかり考へつゞけ」ている「丑松」に、だしぬけに、「瀬川君、何を君は御読みですか」と声をかけた者があつた。「穿鑿を入れるやうな目付」(第十四章、四)をした校長であつた。

『破戒』に描かれた「天長節」の意味については、平岡敏夫氏が指摘している。この場合、天皇を頂点とした明治の身分秩序の社会を想起しておけばよい。その「天長節の式場に用いられた大広間」での校長との出し抜けの出会いを境にして、「丑松」の心境と境遇に大きな変化が起きはじめることになる。校長と「並んで階段を下

りる間にも、何となく丑松は胸騒ぎがして、言ふに言はれぬ不快な心地に成るのであつた。邪推かは知らないが、どうも斯の校長の態度が変つた。妙に冷淡しく成つた。いや、冷淡しいばかりでは無い、可厭に神経質な鼻でもつて、自分の隠して居る秘密を嗅ぐかのやうにも感ぜらるゝ。(中略)どうかすると階段を下りる拍子に、二人の肩と肩とが触合ふこともある。冷たい戦慄は丑松の身体を通して流れ下るのであつた。」(第十四章、四) — その日「丑松」は「不安と恐怖との念を抱き乍ら(中略)学校の門を出た。」「急に烈しい眩暈に襲はれて、丑松は其処へ仆れかゝりさうに成つた。」(第十四章、四) — 「予め金牌を胸に掛ける積りで、教育事業」にたずさわっている校長と、部落民「丑松」との心情の差異に注目する必要がある。

自分の秘密が世間に知られて行くのではないかという不安の中の「丑松」の思ひは次のようなものであつた。

現世の歓楽を慕ふ心は、今、丑松の胸を衝いてむらくと湧き上つた。捨てられ、卑しめられ、爪弾きせられ、同じ人間の仲間入すら出来ないやうな、つたない同族の運命を考へれば考へるほど、猶々斯の若い生命が惜まるゝ。(第十五章、一)

「現世の歓楽を慕ふ心」と「若い生命」を惜しむ心とが同時に「丑松」の思念の世界に上つて来たわけであつた。

しかしこうした思ひとはうらはらに、「丑松」の絶望の思念は深まりやがて彼に死への思ひをいだかせることになる。

『あゝ。』と丑松は深い溜息を吐いて、『省吾さんなぞは未だ死ぬといふことを考へたことが有ますまいねえ。』(第十五章、二)

この「丑松」の述懐を聞いた省吾は、「お志保姉さんも克く其様

なことを言ひやすよ。」(第十五章、二)と答える。

『姉さんも?』と丑松は熱心な眸を注いだ。(中略)間も無く省吾は出て行つた。(中略)丑松は、血の湧く思を抱き乍ら、円い柱と柱との間を往つたり来たりした。『お志保さん、お志保さん。』あてども無く口の中で呼んで見たのである。(第十五章、二)

こうして「丑松」の思念は死への思ひを介して急速に薄幸な「お志保」に近づいて行くことになる。

『若し自分の素性がお志保の耳に入つたら—』其を考へると、つくづく穢多の生命の味気なさを感じる。漠然とした死滅の思想は、人懐しさの情に混つて、烈しく胸中を往来し始めた。(第十五章、二)

部落民ゆえの「お志保」への切ない思ひと「死滅の思想」とが複合して「丑松」の思念の世界を占めて行くようになり、やがて「お志保」への思ひは次のように展開することになる。

『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』と不図斯ういふことを想ひ着いた時は、言ふに言はれぬ哀傷が身を襲ふやうに感ぜられた。(第十九章、一)

あの家へ帰つて行つたとしたところで、果して是から将来奈何なるだろう。『あゝ、お志保さんは死ぬかも知れない。』と不図昨夕と同じやうなことを思ひついた時は、言ふに言はれぬ悲しい心地になつた。(第十九章、五)

「丑松」の思ひが死への思ひを介して「お志保」とのつながりを深めて行く様子が描かれている。

## 三

こうした絶望的な心境の中で、「丑松」はやがて次のような思念と結論にたどり着くことになる。

斯社会から捨てられるといふことは、いかに言つても情ない。あゝ放逐―何といふ一生の恥辱であらう。(中略) あゝ、あゝ、捨てられたくない、非人あつかひにはされたくない、何時迄も世間の人と同じやうにして生きたい―斯う考へて、同族の受けた種々の悲しい恥、世にある不道徳な習慣、『番太』といふ乞食の階級よりも一層劣等な人種のやうに卑められた今日迄の穢多の歴史を繰返した。(中略) 其時に成つて、丑松は後悔した。何故、自分は学問して、正しいこと自由なことを慕ふやうな、其様な思想を持つたのだらう。同じ人間だといふことを知らなかつたなら、甘んじて世の輕蔑を受けても居られたらうものを。(中略) 歎し衰しい過去の追憶は丑松の胸の中に浮んで来た。(中略) 聽て、斯ういふ過去の追憶がごちや／＼胸の中で一緒に成つて、煙のやうに乱れて消えて了ふと、唯二つしか是から将来に執るべき道は無いといふ思想に落ちて行つた。唯二つ―放逐か、死か。到底丑松は放逐されて生きて居る氣は無かつた。其よりは寧ろ後者の方を択んだのである。(第十九章、七)

「丑松」の結論は、「唯二つ―放逐か、死か。到底丑松は放逐されて生きて居る氣は無かつた。其よりは寧ろ後者の方を択んだのである。」と言ふものであった。「あゝ、あゝ、捨てられたくない、非人あつかひにはされたくない、何時迄も世間の人と同じやうにして生きたい」という思いをいだけ「丑松」は、「死」を選んだわけだが、この結論には納得のいかない点が指摘できる。「丑松」は日々

の生活の中で差別されている多くの「同族」の人々のことをどう考へているのだろうか。「死」を考へる「丑松」は、差別されている多くの「同族」の人々と共にあらうとすることを全く考へていない。「丑松」は、自分が他の差別されている「同族」の人々と同じ部落民であること、その心情において現に差別されている部落の人々と共に居ることを拒んでいと言へる。そこに「丑松」の心の病巣があらわにされていると言えよう。「丑松」は父の戒めに従つて、身分を隠しながら立身の道を歩もうとした。そうした「丑松」の思念は、その根源的なところで差別されている他の部落の人々と共に居ないことを意味していたと言へる。

奈何に丑松は「死」の恐しさを考へ乍ら、動揺する船橋の板縁近く歩いて行つたらう。(第十九章、七)

せめて彼の先輩だけに自分のことを話さう、と不図、丑松が思ひ着いたのは、其橋の上である。「噫、それが最後の別離だ。」とまた自分で自分を憐むやうに叫んだ。(中略) 尤も、丑松は直に其足で蓮太郎の宿屋へ尋ねて行かうとはしなかつた。間もなく演説会の始まることを承知して居た。左様だ、其の済むまで待つより外は無いと考へた。(第二十章、一)

「丑松」は、「蓮太郎」に自分のことを話すまで死を留保したが、死への思いを捨てたわけではなかつた。しかしこの死を決したことによつて、「丑松」には新しい世界が実感をももたつて理解できるようになる。

零落―丑松は今その前に面と向つて立つたのである。船頭や、樵曳や、まあ下等な労働者の口から出る言葉と溜息とは、始めて其意味が染々胸に徹へるやうな氣がした。(第二十章、一)

この時はじめて、「貧民、労働者、または新平民等の生活状態を

研究」する「蓮太郎」の思想が「丑松」の心の中に現実のものとして受けとめられるようになったわけである。

「蓮太郎」の演説がすんだことを聞いた「丑松」は、宿の方に行つて「蓮太郎」に会おうとした。がその時、宿の亭主から「蓮太郎」が「高柳」の秘密をあばいたため、襲はれて亡くなったことを知らされたのであった。

涙は反つて枯れ萎れた丑松の胸を湿した。電報を打つて帰る道すがら、丑松は蓮太郎の精神を思ひやつて、其を自分の身に引比べて見た。流石に先輩の生涯は男らしい生涯であつた。新平民らしい生涯であつた。有の儘に素性を公言して歩いて、それで人にも用ゐられ、万許されて居た。「我は穢多を恥とせず。」—何といふまあ壮んな思想だらう。其に比べると自分の今の生涯は—其時に成つて、始めて丑松も気がついたのである。自分は其を隠蔽さう／＼として、持つて生れた自然の性質を鎖磨して居たのだ。其為に一時も自分を忘れることが出来なかつたのだ。思へば今迄の生涯は虚戯の生涯であつた。自分で自分を欺いて居た。あゝ—何を思ひ、何を煩ふ。「我は穢多なり」と男らしく社会に告白するが好いではないか。斯う蓮太郎の死が丑松に教へたのである。(第二十章、四)

「丑松」が「今迄の生涯は虚戯の生涯」であつたことをはっきりとみとめたことが記されている。「我は穢多を恥とせず」という「蓮太郎」の思想と彼の死に、自分のそれまでの生涯についてはげしい反省をうながされた「丑松」は、「自分で自分を欺いて居た」「煩いの多い」人生に決別することを決意するに至る。

急に丑松は新しい勇気を擱んだ。どうせ最早今迄の自分は死んだものだ。恋も捨てた、名も捨てた—あゝ、多くの青年が寝食

を忘れる程にあこがれて居る現世の歓楽、それも穢多の身には何の用が有らう。—新平民—先輩が其だ—自分も亦た其で沢山だ。(第二十章、四)

「死」への思いを抱いた「丑松」は、「どうせ最早今迄の自分は死んだものだ。」という覚悟を固めることによつて逆に生への意志を手に入れる。そして、「恋も捨てた、名も捨てた—あゝ、多くの青年が寝食を忘れる程にあこがれて居る現世の歓楽、それも穢多の身には何の用が有らう。」と、自分を隠して意欲しつゝあつた「現世の歓楽」、「恋」と「名」、そして立身への意志を放棄する。その上で、「—新平民—先輩が其だ—自分も亦た其で沢山だ。」と「蓮太郎」の生涯に力を得ながら自分の身分、自身の身を置くべき地平を正しく自分のものとして受け入れるのである。

こうして「丑松」の「心の更生」、すなわち心の病の克服が自己自身でなされて、「告白」への姿勢が確かなものとして固まる。「死」への思いを導き出した「父の精神」に決別することによつて、部落民であることを受け入れ、「告白」することを決意した「丑松」は、新しい人生を生きようと意欲することを心に決めるのである。

いよ／＼明日は、学校へ行つて告白しよう。教員仲間にも、生徒にも、話さう。左様だ、其を為るにしても、後後までの笑草なぞには成らないやうに。成るべく他に迷惑を掛けないやうに。(中略) 彼是するうちに、鶏が鳴いた。丑松は新しい暁の近いたことを知つた。(第二十章、四)

「新しい暁」とは「丑松」の新しい人生を暗示する言葉であるはずである。

## 四

翌朝の「丑松」の姿を、藤村は次のように描いている。

あゝ、卑賤しい穢多の子の身であると覚期すれば、飯を食ふにも我知らず涙が零れたのである。(第二十一章、一)

「丑松」が自分の出自を受け入れ確かめている姿が示されている。こうして「丑松」の「父の精神」への決別の様相が明らかにされる。

朝飯の後、丑松は机に向つて進退伺を書いた。其時一生の戒を思出した。あの父の言葉を思出した。『たとへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅はうと、決して其とは自由けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたいものと思へ。』斯う父は教へたのであつた。『隠せ』——其を守る為には今日迄何程の苦心を重ねたらう。『忘れるな』——其を繰返す度に何程の猜疑と恐怖とを抱いたらう。もし父が斯の世に生きながらへて居たら、まあ気でも狂つたかのやうに自分の思想の変つたことを憤り悲むであらうか、と想像して見た。仮令誰が何と言はうと、今はその戒を破り棄てる気で居る。

『阿爺さん、堪忍して下さい。』と詫入るやうに繰返した。(第二十一章、一)

「破戒——何といふ悲しい、壮しい思想だらう。斯う思ひ乍ら、丑松は蓮華寺の山門を出た。」のであつた。

其朝は三年生の仙太も早く出て来て体操場の隅に悄然として居る。他の生徒を羨ましさに眺め佇立んで居るのを見ると、不相変誰も相手にするものは無いらしい。丑松は、仙太を背後から抱めて、誰が見ようと笑はうと其様なことに頓着なく、自然と外部に表れる深い哀憐の情緒を寄せたのである。(第二

## 十一章、二)

「丑松」が、部落の少年「仙太」への思いを通して心の底から部落民であること、部落の人々と共に居ることを確かめている姿がここに記されている。以上のようなプロセスを経て、「丑松」の「破戒」、すなわち「告白」が行われることになる。

『皆さんも御存じでせう。』と丑松は嚙んで含めるやうに言つた。『是山国に住む人々を分けて見ると、大凡五通りに別れて居ます。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶と、それからまだ外に穢多といふ階級があります。(中略) 実は、私は其卑賤しい穢多の一人です。』手も足を烈しく慄へて来た。

(中略) 『これから将来、五年十年と経つて、稀に皆さんが小学校時代のことを考へて御覧なさる時に——あゝ、あの高等四年の教室で、瀬川といふ教員に習つたことが有つたツけ——あの穢多の教員が素性を告白けて、別離を述べて行く時に、正月になれば自分等と同じやうに屠蘇を祝ひ、天長節が来れば同じやうに君が代を歌つて、蔭ながら自分等の幸福を、出世を祈ると言つたツけ——斯う思出して頂きたいのです。(中略) あゝ、仮令私は卑賤しい生れでも、すくなくも皆さんが立派な思想を御持ちなさるやうに、毎日其を心掛けて教へて上げた積です。せめて其の骨折に免じて、今日迄のことは何卒許して下さい。』斯う言つて、生徒の机のところへ手を突いて、詫入るやうに頭を下げた。『皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんに私のことを話して下さい——今迄隠蔽して居たのは全く済まなかつた、と言つて、皆さんの前に手を突いて、斯うして告白したことを話して下さい——全く、私は穢多です、調理です、不浄な人間です。』と斯う添加して言つた。丑松はまだ

詫び足りないと思つたか、一歩<sup>ふたあし</sup>三歩<sup>みあし</sup>退却<sup>たいせき</sup>して、『許して下さい』を言ひ乍ら板敷の上へ跪いた。(第二十一章、六)

こうして「丑松」の「告白」すなわち「破戒」は実行された。しかし「丑松」自身にとってこの「破戒」の持つ実質上の意味については、「告白」が実行されるその前の晩に、すでに彼自身の心の中では決着が着けられていたと言える。そうした「丑松」自身の思念を、自ら行動の上に表示して、自身の身を「同族」の人々と全く同じ地平に置くことこそが生徒達の前で「告白」を実行することの意味であつたと言えよう。「正月になれば自分等と同じやうに屠蘇<sup>とそ</sup>を祝ひ、天長節が来れば同じやうに君が代を歌つて、蔭ながら自分等の幸福<sup>しあわせ</sup>を、出世を祈ると言つたツけ―斯う思出して頂きたいのです。」と言ふ言葉は、無論、自分自身立身への思いを断念した「丑松」の言葉であつた。

部落の青年が、明治の社会の中で立身を志した時、たとえば「丑松」のように「父の精神」に従つて、自身を隠して立身を志した時に、どのような悲劇が起り得るかを藤村は示したのであつた。藤村はそういう形で、差別をかかえこんだまま立身出世の相言葉が唱えられた明治の社会の不当性を告発していると言える。明治の世になつて「解放令」が出されたにもかかわらず、なお部落の人々がどのような不利な状況に置かれたかについては、たとえば野間宏氏の指摘<sup>しげ</sup>がある。

こうしたことを『破戒』に即して言えば次のように言うことができよう。身分を隠して「功名を夢見る」こと、立身を志すことは、「部落」の人々を底辺に持つ、明治の身分秩序の社会を差別する側へと登りつめることを意味する。「丑松」の心はそうした意味で、「同族」の人々と共に居ることを拒み続けたのであつた。「丑松」の

「告白」の意味はその点にかかわる事柄であつた。「丑松」は「告白」という行為によって自分のあやまちを認め、自分の身を置くべき地平を明らかにしたのである。「丑松」は「告白」を決意することによって、あるいは「告白」を実行することによって、差別されている「同族」の人々と共に居ることを確認し、自己の眞の人生への出発を自らに告げたのであつた。自身を隠して「功名を夢見る」人生は、父との絆を保ち続けることにはなろうが、「同族」の人々に背を向ける人生を選ぶことになる。「丑松」の「告白」の意味は、父の思念を捨てて、「同族」の人々と共に居ることを確かめることであつたと言えよう。この点で「丑松」の「告白」には、過去の自己、いつわりの自己に対する深い自罰意識が働いていたと言える。

「丑松」が良心に従つて自己の身分を「告白」することは、明治の社会にあつて、自身に保障されていた立身の望みを断たれることを意味していた。しかし「丑松」は「告白」することによって、「同族」の人々と共に居るところから、眞実の自己の人生を歩みはじめることを選んだと言える。

部落の青年であることがどういうことを意味していたかを、藤村は次の「銀之助」の言葉によって示している。

まあ、考へて見て下さい。唯あの男は素性が違ふといふだけでせう。それで職業も捨てなければならん、名誉も捨てなければならん―是程残酷な話が有ませうか。(第二十二章、一)

この「銀之助」の言葉に対して「お志保」は、「父親さんや母親さんの血統<sup>ちすぢ</sup>が奈何<sup>どんな</sup>で御座ませうと、それは瀬川さんの知つたことぢや御座ますまい。」と応ずる。その「お志保」は、あなたも「他の知らない悲しい日も有るかはりに、また他の知らない楽しい日も有るだらうと思ふんです。」(第二十二章、三)と言ふ「銀之助」に、

「『楽しい日?』と」「寂しさうに微笑み乍ら、『私なぞに其様な日が御座ませうかしら。』」と言ひ、「『いえ—私はもう死んで了ひましたも同じことなんで御座ます。—唯、人様の情を思ひますものですから、其を力に……斯うして生きて……』」(第二十二章、三)と語る。そして二人の間に次のような對話が交わされる。

『あゝ、瀬川君のも苦しい境遇だが、貴方のも苦しい境遇だ。畢竟貴方が其程苦しい目に御逢ひなすつたから、それで瀬川君の為にも哭いて下さるといふものでせう。実は—僕は、あの友達を助けて頂きたいと思つて、斯うして貴方に御話して居るやうな訳ですが—』『助けると仰ると?』お志保の眸は急に燃え輝いたのである。(中略)『丁度学校で宿直の晩のことでした。僕が瀬川君の意中を叩いて見たのです。(中略)すると、瀬川君は始めて貴方のことを言出して—「むゝ、君の察して呉れるやうなことがあつた。確かに有つた。しかし其人は最早死んで了つたものと思つて呉れたまへ。」斯う言ふちや有ませんか。噫—瀬川君は自分の素性を考へて、到底及ばない希望と絶念めて了つたのでせう。(中略)それで瀬川君は貴方のところへ来て、今迄藏んで居た素性を自白したのです。(中略)もし貴方に彼の男の真情が解りましたら、一つ助けてやらうといふ思想を持つて下さることは出来ませうまいか。』『まあ、何と申上げて可か解りませんけれど—』とお志保は耳の根元まで紅くなつて『私はもう其積りで居りますんですよ。』(中略)愛も、涙も、決心も、すべて斯の一息のうちに含まれて居た。(第二十二章、三)

こうして「お志保」は、「私はもう死んで了ひましたも同じことなんで御座ます」といつた人生を「丑松」に託すことで、そういう

た人生からの蘇りを果すことに心を決め、又、「丑松」もそうした「お志保」を支えに、「死」への思いから蘇つた自らの新しい人生へ旅立つことを決意することになる。明治社会の身分秩序の中での犠牲者とも言うべき「丑松」と「お志保」の新しい人生を暗示して『破戒』の物語は終わりを告げる。こうした新しい人生に旅立つ「丑松」に対して、「白々と明初めた一生のあけぼの」(第二十三章、三)という言葉は藤村は用意した。「丑松」はかつて自ら身を避け「大日向」と共に「テキサス」とへ旅立つことになる。部落の人々と共に居る新しい人生が「丑松」の前にひらけたわけであつた。

「丑松」における「破戒」の意味は、父との心の絆を保つことによつて、部落の人々を底辺に持つ明治の身分秩序の社会を、差別する側に登りつめる人生を自ら否定して、部落の人々と共に居る、自ら選んだ新しい人生への出発を自分自身に告げることであつた。しかしそうした人生の前には社会の厚い差別の壁が立ちふさがつていふことも又事実であつた。しかし「丑松」は「お志保」と共に、ひとまず「テキサス」で新しい人生を自ら歩むことを決意した訳である。述べて来たような「丑松」の「死から生へ」の蘇りの人生を藤村は、「融和問題と文芸」の中で、「部落民の中から生れて来た一人の青年の教育者の解放と更生を書かうと思ひ立つたのであつた。」と述べたのであつたと考えられる。

父の思念から解放された「丑松」の心境は次のようなものであつた。

丑松は人々と一緒に、先輩の遺骨の後に随いて、雪の上を滑る橇の響を聞き乍ら、静かに自分の一生を考へく歩いた。猜疑、恐怖—あゝ、あゝ、二六時中忘れることの出来なかつた苦痛は僅かに胸を離れたのである。今は鳥のやうに自由だ。どんなに

丑松は冷い十二月の朝の空気を呼吸して、漸く重荷を下したやうな其蘇生の思に帰つたであらう。(中略) 踏む度にさく／＼と音のする雪の上は、確実に自分の世界のやうに思はれて来た。

(第二十三章、一)

「あゝ、世の無情を憤る先輩の心地と、世に随へと教へる父の心地と―その二人の相違は奈何であらう。斯う考へて、丑松は自分の行く道路に迷つたのである。」(第十章、四) といった、「丑松」の苦悩の行きついた世界がここに示されていると言えるであろう。

## 五

次に『破戒』に関して、藤村の述べるところを見ることによつて、その意図を確かめておきたい。

短篇集『緑葉集』の序文には、そこに収められた短篇小説群が、「種々の習作」であること、「下水内の飯山」を舞台にした『破戒』をも含めて「一地方の出来事」のみ限られたものであること、「二三の短篇を除いては、すべて千曲河畔の物語とも見らるゝであらう。」こと等が記されている。これによつて『破戒』が「一地方の出来事」のみ限られた「千曲河畔の物語」として描かれたことがわかるわけである。

ところで、「眼醒めたものの悲しみ」の次の一節に注意したい。

『破戒』の主人公は申すまでもなく、一人の若い部落民を書かうとしたのですが、小諸に七年も暮してゐる間に、あの山国で聞いた一人の部落民出の教育者の話、その人の悲惨な運命を伝へ聞いたことが動機になつて、それから私があゝいふ主人公を胸に画くやうになつて行つたのでした。あの小説の中に書いた丑松といふ人物の直接のモデルといふものはなかつたのです。

然し、私はあゝいふ無智な人達の中から生れて来た、さうして、さういふ中で人として眼醒めた青年の悲しみとでもいふものに深く心を引かれて、それから七年間の小諸生活に出来るだけ部落民の生活といふものを知らうと心がけるやうになつたのです。この一節は、「山国の新平民」を視野に入れて読むと事柄がいつそうはつきりする。「あの山国で聞いた一人の部落民出の教育者の話」とは、藤村が「小諸の馬場裏に居つた時分、隣家に」住んでいた「伊東喜知さんといふ小学教師をして居る人」から聞いた大江磯吉に関する話のことであろう。藤村はその話を聞いて心を動かされ、部落の人々のことを心に思い描くようになったわけだが、しかし、「あの小説(『破戒』―筆者注)の中に書いた丑松といふ人物の直接のモデルといふものはなかつたのです。」と明確に述べている点は重要である。『破戒』の主人公「丑松」に実現されている思想が、藤村自身のものであることが確かめられるのである。

「山国の新平民」には又、

『破戒』の始めに、金持ちの穢多があつて放逐されると云ふことがあつたが、あれは紫屋の主人といふ穢多の方の大意に彼様いふことがあつたのを書いて見たのである。尤も飯山にあつたのではなく、越後の高田にあつた事実である。彼様いふことは有り勝に思へる。

此紫屋の事実については、私が小諸で懇意になつた理学士鮫島晋氏、彼の人は越後の出生で、当時の出来事を知つて居られるものだから、委敷私に話されたのを書いて見た。

とあつて、『破戒』冒頭部分の「大日向」の話にはモデルとされる話があつたことも記されている。

一方、主人公「丑松」の「告白」すなわち「破戒」に実現される

藤村の思想を考える上で大切な要件となる、「行け、戦へ、身を立てよ」と言う「父の精神」にかかわる立身出世の思想について藤村は、「眼醒めたものの悲しみ」の中で次のように述べている。

実際こゝに誰にでも登れる階段があるととして、自分等の国に生れたものは誰でも同じやうに、その階段を登れるものとはばかり思はれてゐる時代に、『破戒』のやうな作を提示したものですから、私は恐ろしく奇を好む者のやうにとられたかと思ひます。今日になつて見ると、その階段を登ることの出来ない同胞が全国に互つて八十万人以上もあるといふには驚きます。

従来、部落民として軽蔑されて来た人達の中からは、立派な学者や芸術家などが生れて来てゐる事を聞きますが、恐らくさういふ人達が自己を教育して他と同じやうに階段を一階づゝ登り、上の方まで登り付くまでの苦心といふものは、慘澹せんとたんなものであつたでせう。

こうしたことについて藤村は、「融和問題と文芸」においても触れている。そしてその文中に「破戒」の眼目を次のように記している。

「破戒」といふ題目文を見た人は何か不道德な僧侶の事でも聯想する様な材料でも取扱つてあるのかと思ふ人があるかも知れないが私はあの「破戒」といふ小文字の意味を全く別な意味のものに替へて部落民の中から生れて来た一人の青年の教育者の解放と更生を書かうと思ひ立つたのであつた。

あの作の中には子の出世を願ふ心から決して自分等の素性を打明るなといふ戒を自分の子に残して置いて、一生を烏帽子山麓の牧場に埋めて仕舞ふ老牧夫の事が書いてある。(中略)即ち、あの作の主人公が、どうして父の固い戒を破る様になつて

行つたか、といふことが私の書かうとした主なる意図であつた。だから、作の背景としてはいろ／＼の人物や、いろ／＼の出来事も写してあるが、作者としての私が読んで貰ひたいと思ふのは、その父と子の関係なのである。たゞ私はあの作に確実性を与へたいと思ふがためにあの主人公を種々の位置に立たせ、或は山国の屠牛場へも連れて行き、或は秋の収穫の為に激しく働く土地の人達の中へも連れてゆくといふ風に描いたのであるから、或は地方色の描写が勝過ぎる様な感じが尠くなく思ふのであるが、私の本意とする処は、それによつて主人公の意義が深められてゆくといふ点にあつたのである。ある人は、あの作を「意識する者の悲劇」といふ風に評してくれたこともあつたのである。

この藤村の言葉によつて、『破戒』の物語が「父と子の関係」に焦点をあてた「部落民の中から生れて来た一人の青年の教育者の解放と更生」を書いたものであつたことが理解されるのである。そこには立身出世の社会的思想の背景があり、「行け、戦へ、身を立てよ」、そのためには自分を「隠せ」という「父の精神」を、子である「丑松」がどういう形で乗りこえて行くかという過程が描かれたわけであつた。父の戒めを破る「丑松」の「破戒」が小説の眼目であることがはっきり理解できるのである。

一方、藤村の描いた「丑松」には、直接のモデルがなかったとは言へ、『破戒』の物語は有り得ない事柄ではなかつた。この点について藤村は「山国の新平民」で次のように述べている。

『破戒』の中に書いてある機多の迫害は、大迎に過ぎたと云ふ人もあつたのだが、兎に角私も八年の間信州に居つて、山国の新平民の状態を見聞したので、彼様いふ風の事はなからうと云

ふ考を有つた人もあらうが、実際あり得る事を書いた積りなのである。

『破戒』の社会的リアリティーについて注意をうながした言葉であると言えよう。

次に『破戒』の問題点を指摘しておく。『破戒』第一章の三に次の一節がある。

はじめて丑松が親の膝下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、さまざまの物語をして聞かせたのであつた。其時だ――一族の祖先のことも言ひ聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のやうに、朝鮮人、支那人、露西亜人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違ひ、その血統は古の武士の落人から伝つたもの、貧苦こそすれ、罪惡の為に穢れたやうな家族ではないと言ひ聞かせた。父はまた添付して、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣――唯一つの希望、唯一つの方法、それは身の素性を隠すより外に無い、『たとへいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅はうと決して其とは自白けるな、一旦の憤怒悲哀に是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたものと思へ。』斯う父は教へたのである。

『破戒』の物語の中で重要な役割をになう一節である。この部分については、「山国の新平民」に次のようにあることがその理解のために参考になる。

小諸の穢多町に彌右衛門さんといふお頭が住んで居る。このお頭のことを、私が始めて聞いたのは、小山英助さんからだつた。

ある日、そのお頭の所へ氏と二人で会ひに行つた。(中略)  
新平民に就いての智識と云ふやうなものは、其人から習つたこ

とが多かつた。彌右衛門さんに言はせると、東海道に住む新平民と山国に住む新平民とは種族が違ふ。東海道筋に住む新平民は多く慥慥な性質を帯びて居る。それは彼等の遺伝性とも見られる。山国に住む方は漂着した露西亜人や朝鮮人の後裔ではなく、大抵大昔からの土着の人や武士の零落したものだから、随つて気質も違ふと云ふのが其人の説だ。

以上の二つの文章の中で共通に使われている言葉に「種族」という言葉があり、その外に「血統」「遺伝性」という言葉が見られる。十川信介氏は、『破戒』(一ノ四)は、明治三十六年のキシネフにおけるユダヤ人虐殺事件に触れている」と指摘している。『破戒』第一章の四に「嗚呼、人種の偏執といふことが無いものなら、『キシネフ』で殺される猶太人もなからうし、西洋で言唯す黄禍の説もなからう。」とある点に關しての指摘である。これは、部落民のことを論ずるのに「人種」の問題を引き合いに出している例である。「種族」「血統」「遺伝性」と言つた例は、「山国の新平民」によれば部落の「お頭」からも聞いたことになるらしいが、しかしそこにはユダヤ人の事柄や黄禍説については書かれていない。『破戒』における部落民をとらえるこころした観点は問題とされるべきであらうと考えられる。この点については、『ルポ現代の被差別部落』の次の文章を紹介しておきたい。長文になるがえて引用してみる。

長い間の差別が能力発掘を妨げ、それがまた、社会的、経済的格差となつて差別を再生産する、と書いてきた。にもかかわらず、学力の格差や社会的地位の低さをとらえて、被差別部落の人びとは先天的に知能が劣る、あるいは性格に問題があるかのような偏見がかなり広くあることを、こんどの取材を通じて知つた。その典型的でない方が、「部落のもの」は近親結婚が多い

から遺伝的に問題が多いんだ」というささやきであった。「血が濃い」といういい方も、これと同じである。

むろん、公式の場できいたわけではない。(中略)あるいは被差別部落の人びとの中にさえ「ワシら同族結婚をくり返しているせいかな……」と自信なげにいう人がいた。これらの言葉は、ある意味で部落差別の「切り札」として使われているような気がする。「平等々々」といっても、そういう人びとは結婚させられない」といういい方にもなるし、口に出しているかどうかは別にしても、被差別部落との縁組みを避けようとするとき、こうしたわだかまりを持っていることが多いと思われるからだ。(中略)この点をはっきりしておかなければいけない、そう思って歴史学者と遺伝学者から専門的な意見をきいてみると、被差別部落にまつわる近親結婚うんぬんの言葉が、二重三重の意味でまったくの根拠のない偏見であり、いいがかりであることがわかった。(中略)

被差別部落では本当に近親結婚が多かったのだろうか。長野県史編纂委員の青木孝寿氏にきくと、むしろ逆ですよ、ということ話してくれた。

— 厳しい身分差別の歴史の中で、「部落」の人同士の結婚が圧倒的に多かったのは事実です。けれど江戸時代の戸籍にあたる宗門人別帳や明治以後の壬申戸籍、その他さまざまな資料を調べてみると、信州各地に点在する被差別部落相互の間で、非常に広範囲の縁組みがおこなわれてきたことがわかる。同じ「部落」内での縁組みは珍しく、いわゆる近親結婚はまれなのです。(中略)信州の場合、むしろ山村の一般集落のほうが、はるかに狭い範囲で結婚をくり返してきたんです。被差別部落

のように、情報網が発達していなかったせいでしょう。

では、被差別部落と近親結婚を結びつけて考える人が一般的に多いのは、なぜかというところ、圧迫され続けてきた「部落」の人びとには運命共同体的な同族意識(仲間意識)が強いのですが、これが血縁的な同族と混同されてしまったのではないのでしょうか。明治以後、「部落」は人種が違う、というふうな誤った学説がまことしやかに広がったことなども、それに拍車をかけました。(傍点筆者―注)このため互いに血縁のない者同士の結婚でも、一般の人びとには「血族結婚」の印象を与え、あるいは意識的に「近親結婚が多い」というふうにすりかえられてしまったのではないのでしょうか。「部落」の場合、互いに血縁関係がなくても同じ苗字が多いために、誤解を招く面もあったと思います。

なかにはもちろん近親結婚の例もあったでしょう。けれど、それはいとこ同士とか、その子ども同士のようなもので、その程度のことなら、どの社会・階層にも普通にあつたことです。

それをことさら被差別部落と結びつけて、血が濃いなどと根拠ありげにささやくこと自体、悪質な中傷であり、差別だと思っ

— さらに東京医科歯科大学の人類遺伝学教室の大倉興司・助教授に話をきくと、そもそも血族結婚に対する考え方が、「血が濃い」といった概念自体に偏見が満ちみちていることがわかった。大倉助教授はこういった。

— 専門的な理屈をいっさい抜きにしていえば、近親結婚によって肉体や精神に異常の現れた子どもが生まれる確率はたしかに普通より高い。けれど近親結婚によって生まれた子どもの能

力が全体に低下するようなことは、絶対にありえない。しかも、ある地域集団で血族結婚をくり返したとしても、異常の出る確率がだんだん高くなるというわけではないんです。だいたい日本人は近親結婚がたいへんに多い民族で、いまでも二十組に一组はそうであり、なんと欧米の約十倍にあたります。(中略) けれど日本人に「異常」が多いという報告はない。広島県のある村(「部落」ではない)では、住民の七〇パーセントが近親結婚をしてきたといわれます。まさに「血が濃い」わけですが、だからどうということはない。むしろ、生物学的に冷徹ないい方をするなら、近親結婚によって生まれた異常児には生命力、繁殖力が乏しいため、そこで悪い遺伝子が途絶えることが多く、近親結婚を代々くり返すことは悪い遺伝子を自然淘汰することになる、とさえいえるのです。

被差別部落と近親結婚を結びつけてとやかくいういい方は私もよく耳にするけれど、近親結婚が多かるうが少なかるうが、そんなことはそもそも問題にもならない。被差別部落に遺伝的な問題があるなんて、ばかげたいがかり以外のなにもでもありませんよ――

胸のつかえがいつべんにおりる気がした。被差別部落に対する偏見を自分自身が持とうとしていたことに、恐ろしさを感じた。(中略) 差別心とは悪意から生まれるだけでなく、無知からこそ生まれるのではなかるうか。身をもって知る思いだった。『破戒』は、日本近代文学の名作であり、文学史的にも重要な作品である。しかし読者に大きなつまづきを与える可能性を持った社会的問題を取り上げている以上、現代の視点からの批判が『破戒』

の読者には要請されているといえる。『破戒』は社会小説として、その時代的制約を指摘できる作品であると言い得るであろう。

### 注

- (1) 佐々木雅彦「破戒」試稿―自立への道―(『日本近代文学』第一四集、昭和四六年三月)。
- (2) 水本精一郎「破戒」再考―島崎藤村・覚え書Ⅳ―(『山口大学文学会誌』26、昭和五十年十一月)。
- (3) 平岡敏夫「破戒」私論(大東文化大学『東洋研究』第二三号、昭和四五年六月)。
- (4) 野間宏「破戒」について(岩波文庫、島崎藤村著『破戒』所収)。
- (5) 「融和問題と文芸」(『融和時報』昭和三年一月号)。
- (6) 「眼醒めたものの悲しみ」(『読売新聞』大正二年四月四日)。
- (7) 「山国の新平民」(『文庫』明治三九年六月)。
- (8) 十川信介著『島崎藤村』所収「二つの破戒」。
- (9) 朝日新聞長野支局編『ルポ現代の被差別部落』(後、朝日文庫に収録、若宮啓文著『ルポ現代の被差別部落』)。